〔物語〕関東大震災からの復興と築地小劇場の興起ー小山内薫、土方与志、山本安英、東山千栄子ー

第十一節　築地小劇場子どもの日

（第一年十二月②『そら豆の煮えるまで』）

土方邸で開かれる演劇研究会への参加を許された及川道子は、築地小劇場発足から六ヵ月後〈子どもの日〉公演の主役として初めて舞台に立った。演目『そら豆の煮えるまで』において彼女が機敏な少年を演じ、山本安英が王妃たる相手役を勤める。その年及川は小学校を卒業したが、病弱を懸念した医家の助言により上級学校への進学を保留されていた。しかし、芸術への向学心は抑え難く、初舞台の翌年東京音楽学校の難関を突破する。

『そら豆の煮えるまで』への出演（及川道子著『いばらの道』）

こうして劇関係者の人々に会ったり、度々芝居を見せてもらったりしたので、生来の芝居好きに益々拍車をかけられて、築地小劇場が出来てからは、その第一回公演以来ひとつもかかさず見ていました。そして、その年の暮和田さんの御紹介で小山内先生にお会いして、私の初舞台ー築地のクリスマス劇『そら豆の煮えるまで』に出たのでした。

さて小山内先生にお会いして、直ぐに出ることに決まり、台本をもらって意気揚々と帰って来ると、母はその台本を手にとって見るなり、びっくりして「日曜学校のクリスマスによくやった童話劇や活人画かぐらいに考えていたのに、こんなむずかしいほんもののお芝居がお前に出来るかしら?」と、私の顔を心配げにマヂマヂと見つめています。そう言われてみると、私も何だか不安になって来ました・・・台本をもらってから二、三日して、「お母さん、セリフを云ってみますから台本をよく見ていてください。」と云って、台本を母に渡し、はじめから終りまでみんなのセリフを全部空で云って聞かせましたら、母の心配も少しは薄らいだようでした。・・・

三日目の日のことだったと思います。最初の出にあの可愛いい童謡「お手々つないで野道をゆけば」を唱いながら出るのですが、その日どうしたことか「みんなかわいい小鳥になって」というところで声が出なくなってしまいました。するととっさにだれか舞台の横あたりからすぐにそこを上手に唄いつないでくれました。それが山本安英さんであったことを後で知って、子供心にも山本さんの親切を身にしみて感じたことでありました。顔の作りなども最初一、二度だけ青山先生に教わっただけで、あとは一人でやりましたが、それも山本さんが側にいて、何から何までいろいろ親身に教えて下さったから、やれたのだと思います。

山本さんははじめて会ったときから、誰よりも一番私を可愛がって下さいまして、私も山本さんが特別にすきで、姉さんのようになにかと相談したり教えられたりいたしました。このお芝居の間中、毎日着たままの一枚看板、セルのワンピースで、十二月の寒空をせっせと通い続けたのですが、緊張していたせいか、寒いとも何とも思いませんでした。

このお芝居がすんでから、こんどはまた私には生まれて始めてのラジオ放送に出ました。同じ『そら豆の煮えるまで』で、配役もすっかりお芝居のときと同じでした。これがどんな出来栄えであったか、ただ夢中でやっただけで知る由もありませんが、放送がすんでから大変です。初舞台、初放送、そして次に来たもの

が、これがまた生まれてはじめての大金です。ーお芝居や放送のごほうびなのです。

何もかも全く夢のようで、家に帰ってから、母にお頼みしてその中から私にとって大変なお金を出していただき、いきなりオモチャ屋に飛び込んで、妹や弟達にたくさんのおもちゃを買い込んでしまいました。それを両手に一杯かかえて帰る途すがら嬉しかったこと！時ならぬ、そして思いもよらぬおみやげに、妹や弟達がどんなに喜んでくれたことか。いまでもあのときのうれしさは、忘れ得ないでいます。 ①

小山内薫がもともと児童劇に関心を抱いたことは、左記〈子どもの日〉への挨拶によっても察知できるが、大正自由教育の一環である雑誌『赤い鳥』へも寄稿していた。同誌には大正十年九月小山内の少年少女劇「イルゼベル」が、また築地小劇場発足の四ヵ月後には彼の童話「雷と一しょに暮らした男」が掲載される。『そら豆の煮えるまで』の邦訳も演出も小山内が果した。②

小山内薫「〈子どもの日〉の催し」（『築地小劇場』第一巻第七号）

築地小劇場は児童芸術社と協同して、この十二月の二三日から一週間、クリスマスとお歳暮をかねて〈子

① 及川道子著『いばらの道』七三ー七七頁。

② 『赤い鳥童話名作集（上級）』小峰書店、一九四八年。四三ー六〇頁。および『赤い鳥』大正十三年九月号、一八ー二三頁。

ども供の日〉の催しをいたします。

勿論これは子どものためというのが第一義で、芝居ばかりでなく、音楽だの曲芸だの、子どもの喜びそうなものをヴァライエティ式に列べてやるつもりですが、特に大人諸君の御注意を乞いたいのは、私が演出することになっています『そら豆の煮えるまで』という一幕物の芝居と『遠くの羊飼』と申す七場から成る無言劇であります。

『そら豆の煮えるまで』は元の題を『そら豆の煮える間に通った六人まで』と申すのです。〈鞄劇場〉というものを案出したので有名な亜米利加のスチュアアト・オオカアが書いたもので、近代児童劇の傑作の一つと言われているものです。・・・

『そら豆の煮えるまで』の中には教訓もあり、諷刺もあります。それは誰にでもー恐らく七つぐらいの子どもにでもー分かる教訓や諷刺であります。それでいて、その教訓や諷刺などを少しも考えないでも、この芝居は面白いのです。ただ漫然と見ていても面白いのです。教訓や諷刺を少しも強いる態度がない。しかも教訓や諷刺が厳然と控えている。そこにこの作の児童劇としての価値があるのです。・・・

〈子どもの日〉の余興として、オルケストル・ミニアチウルを組織して、「玩具のシムフォニイ」といったような曲を幕合に演奏して貰うことになっています。また「帽子百変化」と申しまして、一つの帽子でナポレオンになったり、羅馬法王になったりする芸当などを御覧に入れようかと思っています。これは私が倫敦の大道芸人から教わったもので、それを築地小劇場の役者の一人に教えて、やらせてみようと思っている

のです。その外まだ色々奇抜な計画がありますが、ーあとはたのしみに取って置きましょう。①

〈子どもの日〉演目（十二月二三日より二九日まで）

一、音楽（玩具のシムフォニイ）
二、帽子百変化（劇団員某演）
三、スチュアアト・オオカア作・小山内薫訳『そら豆の煮えるまで』演出　小山内薫
四、音楽（童謡のポツプリ）
五、オランド・ハドソン作『遠くの羊飼』（パントマイム）演出　小山内薫・岩村和雄
六、「蝙蝠座の印象」（舞踊）　振付　岩村和雄
七、「玩具の兵隊」（舞踊）　振付　岩村和雄　②

戯曲『そら豆の煮えるまで』は児童劇として提供され、主役たる少年に及川道子を起用するが、物語の核心は政治的な諷刺である。ある国の王妃が些細な過失を罪に問われ、死刑の判決を受けた。斬首の執行は明日正午

① 小山内薫「『そら豆の煮えるまで』と『遠くの羊飼』とのついて」（『築地小劇場』第一巻第七号）四〇ー四三頁。
② 『築地小劇場』第一巻第七号）折り込み

であり、その時四つの時計が鳴り終わるまでに逮捕されねば、法規により刑を免れる。その朝王宮を脱出した王妃は、民家の台所へ逃げ込んだ。そこでは昼食を目前にして、少年がそら豆を煮ている。王妃の窮状を聞いた少年は、急ぎ彼女を隣室に匿う。その台所へは役者、少女、盲人、歌手などが次々と寄り、各々世情を語ったあと、ついには首斬り役人が現れる。潜む王妃を護るのは、この少年と一匹の蝶のみである。

スチュアアト・オオカア作・小山内薫訳　『そら豆の煮えるまで』

幕が上がると、台所が現れる。ベンチ、腰掛、食器棚などがある。奥に大きな扉があって、明けると廊下である。・・・右手に少年の母の寝部屋へはいる扉がある。大きな瀬戸引きの匙が食器棚の棚の上に乗っている。一つの大きな蝶が戸口からはいって来て、そこらを飛び廻り、舞台の向うを見る。少年の歌が庭から聞えて来る。蝶は戸口へ行き、一瞬間そこでひらひらして、さて食器棚に翼を休める。

少年がそら豆のいっぱいはいった大きな鉢を持ってはいってくる。蝶は鉢のそばへ飛んで行き、やがて満足して食器棚へ帰る。少年は蝶を見て笑う。併し蝶には手を触れない。それからそら豆を鍋の中へあける。乱暴にやるので、湯が手にはねかえる。

途端に遠くで誰かの呻く声がする。少年と蝶が戸口へ行く。王妃の呼ぶ声が聞える。「喋々や、喋々や、あたしどこへ隠れたら好いのだい。」王妃がはいって来る。

王妃　坊ちゃん、坊ちゃんーああ、あたしは発狂しそうだ。
少年　（憐れむように）どうして発狂しそうなの。
王妃　ああーああーあたしは首を斬られるのだよ。
少年　いつ。
王妃　お昼前に。・・・
少年　じゃあ、坐って、お話をして頂戴。
（王妃の為に黒い枕を段の上に置いてやる。そして自分は橙黄色の枕に腰を据える。）
王妃　ゆうべ、あたし達はお隣りの国と戦さをやめた二年目のお祝をしたんだよ。御馳走が済むと、ミヌエットの踊りになったの。その時あたしは王様の大伯母様の指輪をはめていらっしゃるおみ足の指を踏んだのよ。
少年　御免なさいって言わなかったの。
王妃　言っても駄目なの。法律によるとね、王妃が王様の大伯母様か、または大伯母様の一族のお方の指輪をはめている足の指を踏むとね、その王妃は、王様の四つの時計がお午に十二時を打っている間に、首を斬られなければならないのだから。
少年　それはきょうのことなの。
王妃　ああ。
少年　だってもうお午でしょう。僕がそら豆を煮てるんだもの。
王妃　王様の四つの時計が打ってしまうまで隠してくれれば、あたしは命を捨てずに済むのだよ。

〔中　略〕

首斬役、戸口からはいって来て、目につくように斧を突き立てる。少年、振り向いて、びっくりする。

首斬役　お前は王妃を見たか。
少年　え、なんですって。・・・
少年、首斬役の気のつかないように、鍋にはしり寄る。
少年　そら豆、そら豆、時を煮ろ。王妃様の助かるように。
首斬役、蝶を追っかけ廻す。突然大きな時計が鳴り始める。続いて二つの時計がゆっくり鳴り出す。
首斬役、斧を持って、奥の戸口へ突き進む。
首斬役　喇叭役はどうしたのだ。なぜおれを呼ばないのだ。
少年、時計の打つ数を数える。三番目の時計が十二時を打ち終わると、寝部屋の戸口へ駈け寄る。
少年　王妃様、王妃様。もうお午です。
首斬役　王妃だーー王妃だとーー（寝部屋に飛び込んで、王妃を引き出す。）まだ小さい時計が鳴らないぞ。（王妃を奥の戸口の方へ引きずって行きながら叫ぶ。）こら、こら。小さい時計を鳴らすな。金貨の桶はおれのものだぞ。
少年、戸口にベンチを置いて、首斬役をつまづかせようとする。蝶は首斬役の鼻先を飛び廻る。首斬役くしゃみをする。
少年　聞こえやしないよ。
王妃　放して、放して。

首斬役　（首斬役でなければできないようなくしゃみをしながら）王妃だ、王妃だ。

小さい時計が鳴り出す。少年、一生懸命に勘定する。一つ、二つ、三つ―音と音の間に首斬役くしゃみをしたり、叫んだりする。

首斬役　王妃だ、王妃だ。

五つ目が鳴ると、首斬役がっくり膝を折る。王妃、威厳を正して、首斬役の首に足をかける。少年、王妃の側に跪く。

王妃　悪人め。法律によって、あたしは助かった。その代わり、今度はお前の番だ。王様の四つの時計を巻く役目として、法律によると、四つの時計が一緒に鳴らない時は、お前が斬首になるのだ。①

『そら豆の煮えるまで』（第十八回公演）配役

少年	及川道子	王妃	山本安英	役者	東屋三郎
盲人	汐見洋	唄うたい	丸山定夫	首斬り役人	横田寿
小道具	后東光	演出	小山内薫 ②		

乳搾りの娘　伏見直江
口上言い　青山杉作

①「そら豆の煮えるまで」（小山内薫著『童話劇　三つの願い』イデア書院、一九二五年。一六三―一六四、一六八―一六九、二〇九―二一〇、二一六―二一七頁。

②　水品春樹著『新劇去来―築地小劇場史』一三〇頁。

『そら豆の煮えるまで』の解説も〈子どもの日〉の観劇記録も僅少ななかで、観客の常連たる浅野時一郎の回想はやや詳しく、舞台の装置や及川道子の演技にも言及している。

築地子どもの日（浅野時一郎著『私の築地小劇場』）

〈子どもの日〉では『朝から夜中まで』の構成装置が取り払われて、すっかり明るさを取りもどした舞台で、昼間の一時から美しく楽しいクリスマス・プレゼントが贈られた。音楽がふんだんに流され、小島政二郎の童話や丸山定夫の帽子の手品があり、踊り・パントマイム・童話劇という番組だった。残っているプログラムに、当日聞いた曲の名が書き込んであるのを拾うと、「おもちゃのシンフォニイ」「モオツアルトのセレナーデ」「ガボット」「ロマンス」「驚愕シンフォニイ」「トルコマーチ」などとある。これは芝居と芝居の間の音楽なので、舞踊にも芝居にも別に伴奏があったのである。にぎやかで楽しい午後のひとときだった。

二人の中世ふうのデコルデの美女が踊る「蝙蝠座の印象」は田村と若宮であり、男優たちの兵隊さんの踊りは「おもちゃの兵隊」で、この時前に述べたアンコールの添え物があった。・・・

『そら豆の煮えるまで』という児童劇も、口上言いが出て、小道具の説明をすることから芝居が始まる。その口上言いは、時々客席から子どもが質問するのに答えたりする。こういうくふうは、舞台と子どもたちの心をつなぐよい手段だった。この芝居にも王女や王妃が出、首斬役人や大臣が悪役になる。西洋の子ども

はこういう話に親しんでいるのだろう。日本でもお伽噺にはお姫様が出てくるものだ。

童話劇の主役に十三歳の及川道子が初登場した。テキパキとした舞台で、出ずっぱりの役をりっぱに勤めていた。及川はこの時から断続的ではあるが、四年間の全部にわたって出演している。その一番上出来な役はこの少年と、翌年暮れのチルチルだった。

パントマイムも児童劇も美しい衣装の色で目を奪った。その装置や衣装の担当者の名が出ていないが、よい趣味で統一されていたのは忘れられない。遺憾だったのは、私の見た暮れの一日は、あまり子どものお客さんがいなかったことである。この興行は正月にも五日間続演されて、その時は子どもがたくさん集まったそうであるが。①

飯倉片町の自宅で被災した島崎藤村はしばらく隣家で間借りしたあと、翌年からは築地小劇場での観劇が一家の楽しみとなった。自伝的な秀作『嵐』は、愛妻の亡きあと男手で四人の子どもを育てる物語である。

わが子どもらと『そら豆の煮えるまで』（島崎藤村著『嵐』）

楽しい桃の節句の季節は来る。月給にはありつく。やがて新しい住居での新しい生活も始められる。その一日は子供らの心を浮き立たせた。末子も大きくなって、もう雛いじりでもあるまいというところから、茶

の間には古い小さな雛と五人囃子などをしるしばかりに飾ってあった。それも子供らの母親がまだ達者な時代からの形見として残ったものばかりだった。私が自分の部屋へ戻って障子の切り張りお済ますころには、茶の間のほうで子供らのさかんな笑い声が起こった。お徳のにぎやかな笑い声もその中にまじって聞こえた。

見ると、次郎は雛壇の前あたりで、大騒ぎを始めた。暮れの築地小劇場で〈子供の日〉のあったおりに、たしか『そら豆の煮えるまで』に出て来る役者から見て来たらしい身ぶり、手まねがはじまった。次郎はしきりに調子に乗って、手を左右に振りながら茶の間を踊って歩いた。「オイ、とうさんが見てるよ。」と言って、三郎はそこへ笑いころげた。　・・・

娘がぱったり洋服を着なくなった。・・・「冗談じゃないぜ。あの上着が十八円もかかってるよ。そんなら初めから洋服なぞを造らなければいいんだ。」日ごろ父一人をたよりにしている娘も、その時ばかりは私の言うことを聞き入れようとしなかった。お徳がそこへ来て、「どうしても末子さんは着たくないんだそうですよ。洋服はもういらないから、ほしい人があったらだれかにあげてくだすってもいいなんて、」こういう場合に、末子の代弁をつとめるのは、いつでもこの下女だった。

それにしても、どうかして私はせっかく新調したものを役に立てさせたいと思って、「洋服を着るんなら、とうさんがまた築地小劇場をおごる。」と言ってみせた。すると、お徳がまた娘の代わりに立ってきて、「築地へは行きたいし、どうしても洋服を着たくないし。」それが娘の心持ちだった。・・・お徳に言わせると、

① 浅野時一郎著『私の築地小劇場』九四ー九六頁。

末子の同級生で新調の校服を着て学校通いをするような娘は今は一人もないとのことだった。①

日本における児童劇公演の嚆矢は、女優養成機関の設置と同じく、川上音二郎とその妻貞奴の創意とされる。三度欧米を旅した川上は、明治三五年『オセロ』などの翻案を明治座で上演するとともに、児童文学者たる巌谷小波と久留島武彦の支援を得て、本郷座で児童劇を披露した。② この際西洋風の舞台をと貞奴がとくに希望し、演目は巌谷小波編『世界のお伽噺』から『狐の裁判』と『浮かれ胡弓』が選ばれる。

わが国初の児童劇開幕（富田博之著『日本児童演劇史』）

会場は東京の本郷春木町にあった本郷座、期日は明治三六年十月三、四日の二日間と決められた。・・・最初のお伽芝居の演目、『狐の裁判』と『浮かれ胡弓』については、当時の演劇雑誌や新聞がほとんどすべて紹介あるいは批評をのせている。それらを見ても、この時期に子どものための演劇としてのお伽芝居がいかに喜び迎えられたかがわかる。・・・十月六日付の都新聞には伊原青々園が「本郷座のお伽芝居」というタイトルで、これまた力を入れた劇評を書いている。青々園といえば、当時もっとも権威のある劇評家として知られており、その批評は大きな影響をもつものでだった。

① 島崎藤村「嵐」（『島崎藤村全集』筑摩書房、一九六七年。第十巻、一二―一三頁。）

② 秋庭太郎著『日本新劇史』上巻、理想社、一九五五年。四二七頁。

「巌谷小波氏の『洋行土産』で独逸にこんなものがあると初めて知った自分はどうか日本にもそれが欲しいと渇望していたが、今度いよいよ川上の発企で興行する事になったのは嬉しい。自分の見たは初日で、丁度小波氏の演説が済んだあとであったが、満場割るるばかりの大入り、しかもその過半以上少年少女で占めていた。・・・『浮かれ胡弓』はグッと面白い。これは原作そのものがよく出来ているからで、自分は筋書を読んだときから、確かに大受けだと思った。が、さて舞台にかけると、シテ役の貞奴が大出来なので一層よく見える。西洋では兎に角、日本で貞奴が役者となってからは、今度ほど大出来のものはまだ見たことがない。まず少年の、水が垂れるやう若く美しくて、しかもアドケない処が、お伽話の人物として希代にはまっている。・・・日本の少年に面白きお伽話を供給した小波氏が今また外国風のお伽芝居までを紹介せられたことと、向上英気ある川上がその最初の興行者であることと、貞奴の技芸にいよいよ進境を認めたことと、この三つは吾々はよく記憶に留めて置かねばならぬ。①

小山内薫・市川左団次の自由劇場も開始された有楽座では、明治四二年から〈子供日〉の催しが始まった。一月十五日から三日間第一回として組まれたのは、「奏楽、神楽、少年剣舞、曲芸、活人画、活動写真、お伽劇団による小波作のお伽芝居『玩具の窟』」である。「それ以後毎月変わりで、毎週土日曜と祭日のマチネーが〈子供日〉となり、」有楽座が帝国劇場と合併するまで十二年間にわたり継続された。これに係わる記録のなかでは、

① 富田博之著『日本児童演劇史』東京書籍、一九七六年。四二―四五頁。

〈子供日〉へ出演した女優栗島すみ子の思い出や、若い娘たちで華やかな観客席を描写する岡田八千代（小山内薫の実妹）の劇評も見出される。① こうした児童劇の人気と少年少女への影響は、土方与志の自伝にも誌される。

お伽芝居と児童劇の思い出（土方与志『なすの夜ばなし』）

なんでも六、七歳の頃と思うが、神田の三崎座にお伽芝居があったので、家の者に連れて行かれた。『二つ星』とか『三つ星』とかいう題のものを見た事と、久米八丈が鬼女のような形で踊りまくったのを、驚異をもって眺めたことしか覚えていない。また、その少し後に祖父に伴われて目白の女子大学の卒業式に行き。学生の演じた詩劇のようなものを見た。アドリア海の場面かで、新体詩型の台詞が新鮮で、神秘的に美しい印象をうけたものだった。

私は九段の暁星小学校へ入学した。この学校は今日のそれよりも、ずっと万事フランスの学校に近かったようだ。学校劇も奨励されていた。入学すると間もなく、ある式日に私も一年生の対話劇に、その他大勢として出された。・・・この日中学の上級生の演じた、フランスの政治犯人が同志からパンの中に入れて送られた紙片によって、脱獄に成功するという筋の一幕物に感激した。この主人公を演じたのは、油屋三三郎、後年の東屋三郎君だった。彼のほかに金井謹之助君もここの名優だった。・・・

① 富田博之著『日本児童演劇史』六四ー六八頁。

私の少年期にはまだスポーツも、映画もなかったと言っていい時代だった。母が安心して、日曜日の娯楽として私に与えたものは、有楽座の〈子供日〉だった。小学校の同級生も大勢見に来た。。沢山の従兄弟達も見に来た。『浮かれ胡弓』に興奮した。クリスマスや正月に親類の子供達が集まる時には、有楽座の真似事がかならずはじまった。

私は子供日のもっとも熱心な常連の一人になった。そこに行く度に、舞台左手のボックスに巌谷小波氏が三一君を連れて坐っているのを見た。父のない私は、この高名なお伽噺の大家を父にもった三一君を秘かに羨ましいな、とそのたびに思った。母と子が年老いた祖父の家に引き取られるというような筋の『小公子』という翻訳劇を見て、自分の境遇に似ている処から一緒に行った母と大変に泣いた事を憶えている。①

築地〈子どもの日〉は第二年の暮にも、及川道子主演『青い鳥』を演目として催され、その後小山内薫はモスクワで〈子どものための劇場〉を見学した。昭和二年十一月彼はソビエト革命十周年記念式典への招請を受け、米川正夫や秋田雨雀とともに旅したのである。当地での滞在は十日間であったが、最後の一日に〈子どものための劇場〉への訪問を勧められる。この劇団は常設の映画館を借りて、毎日午後三時から六時まで公演。これを運

① 土方与志『なすの夜ばなし』二三八ー二四〇、二四二ー二四三頁。

営するナタリア・サアツが、『青い鳥』の作曲者イリヤ・サアツの姪であることにも、小山内は惹かれた。 ①

小山内薫「露西亜における子どものための劇場」

私達は楽屋を通って、階段をあがり、小さい狭い部屋へ通された。正面の壁を背にして大きな卓の前に若い美しい婦人が坐っていた。断髪である。細い長い眉毛、理智に輝く大きな目、鼻筋が通って歯が白く美しい。紺地に色糸で縫いのしてある、質素ではあるが、趣味の好い着物が、ほっそりした体を包んでいる―それがナタリア・サアツだった。

四方の壁には舞台装置の下図らしいものが沢山にピンで留めてあった。卓上には切抜帖らしいもの、写真帳らしいものが沢山積んであった。サアツは快く私達を迎えると、直ぐに自分の劇場について話しだした。私達は米川氏の通訳でそれを聴いた。

「大人には選択力というものがあります。でんでの趣味なり傾向なりで、ある人はスタニスラスキイの芝居を見に行く。ある人はメイエルホリドの芝居へ行こうとする。ある人はタイイロフが好いと言う。ところが、子どもにはまだそれだけの鑑識がありません。そこで私達の方から子ども達の鑑識を作ってやるようにする重大な責任があります。すなわち、子どもの将来の為に高い鑑識を作ってやるような好い芝居を見せな

① 小山内富子『小山内薫―近代演劇を拓く』二三七―二三八頁。

「露西亜における子どものための劇場」（『小山内薫全集』第六巻、五九八―五九九頁。）

ければなりません。」私はまずこの抱負の細心で、しかも遠大なのに敬服した。・・・

「私の方の劇場では、一つの演出をする前に。まず子ども達を集めて、演出しようとする脚本を読んで聞かせます。それから子ども達に、もしこの芝居をやるとしたら、どんな舞台装置でやったら好いか、それを絵にかいて出させるのです。これは「ガイワワタ」をやる前に子ども達にかかせてみたものです。・・・私達はこういった子ども達の舞台意匠を元にして、専門の舞台装置家にプランを立てさせます。それからいよいよ芝居をします。さて芝居を見た後の印象を子ども達に絵で書かせるのです。・・・ここに貼ってある小さな紙片はごく小さい子ども達が書いたもので、ただどの役が面白かったとか、誰が巧かったという簡単なものですが、すこし大きい子どもになると、兎に角この通り立派な文章で書いて来ています。」・・・

見物席は二階になっていて、収容人員は六八〇人である。席につくと私は、すぐ周囲を見廻した。ほとんどすべてが子どもで、気持の好いほど大勢集まっている。あらゆる階級の子どもが集まっているようだが、大部分は労働者の子どもらしい。しかし存外行儀がよくて、みんな吾々の顔を見て、にこにこしている。付添いで来ているお母さんやお婆さん達も、みんな布で頭を包んだ粗末な外套をきたままの質朴らしい人達ばかりである。やがて舞台に、ナタリア・サアツが現れた。終始微笑を含みながら、子ども達に何か挨拶をするのである。・・・サアツの挨拶の内には確かに「きょうは日本からのお客様が着ているから、みんな特別におとなしくしなければいけない。」といったような意味の言葉があったらしい。それを聞くと、子どもが

一斉に私達の方を見た。わざわざ自分達の席を離れて、私達の顔を見に来る者さえあった。①

① 「露西亜における子どものための劇場」（『小山内薫全集』第六巻、六〇〇―六〇四頁。）